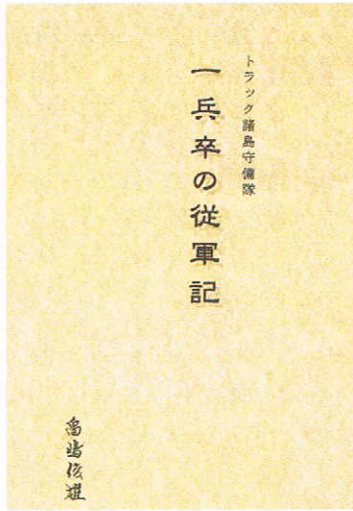


島島俊雄従軍記

一 十歳を過ぎ家庭を持つてからの招集であった石橋太三にくらべて、二十歳の現役兵で軍隊に入った島島俊雄の軍隊に対する思いは、共に生死の境を生き抜き八十余輩まで人生を全うしている二人ながら違ったものがある。

「我々の青春時代は総て軍事一色、日常生活に於いても男は眼爛々と輝き、鷹の如く精悍であるべし。口はへ

の字に結び、女に歯を見せるが如きは男児に非ず。武士道とは死ぬことと見つけたり、などと強いて強面を崩そうとはしなかった。」と血気盛んな文面で始まる。男は「成人すれば兵隊と決まった時代。為すことすべてお国の為、天皇陛下の御為に戦場に屍をさ



らすは男子の本懐とするところ。一家一門の名誉であると教えられて育ってきた。学校教育に於いてもまた然り。「華々しく手柄を立てて、白木の箱で帰ってくるぞと口癖のように言っていた」と戦時中の多くの青年が抱いていたものが吐露されている。弟（東頭外光）も憂国の情に燃えて十八歳で志願兵として、同時に昭和十八年四月一日の村祭りの日に入営した。祖母が車窓から手を振り、「この日の為に育ててきた。しつかり奉公たのむぞ」と泣きはしなかったというから、銃後の守りとはいえ押さえがたい感情を微塵も見せない祖母の気丈夫が、島島兄弟を育てたものと思われる。

軍 隊生活は誰もが員数合わせに苦労したように、「失せ物の員数合わせに苦労する。誰しも経験する事だが、次から次と盗んできて、自分の持ち物の数をあわせておく。ひどいになると、員数外と称して余分に隠しもっている者さえいたのである」。兵器は天皇より預かったものであり、紛失すると厳罰が待っていた。ある中隊で演習中に銃の部品を落として割腹自殺する事件まであったと云う。

初年兵に付きもののピンタは金戸村の出身である中仙道上等兵のおかげであまりなかったなかつたと云う。軍隊

は運隊といわれるように、その中仙道上等兵がトラック諸島へ行く途中に魚雷を受けて戦死している。

早速救助された兵を探して聞いてみた。「いやー、中仙道君は責任感の強い男、人先に待避する事はないと思う。彼は船艙当番で中にいたのだが、あの時人を繩梯子に押し上げていたと言うが、ほとんど助かっているのだ。俺は爆風にとばされて助かった。」と、三人の兵が話してくれた。正に断腸の思

出陣 間近に立野が原演習場へきた母が自決用短刀を渡したのは驚かされる。それが後に魚雷攻撃を受け海底に引き込まれるときに本人の命を救うとは、親の強い思いに不思議な縁を感じざるを得なかった。

制空権も制海権もない中を二度の雷撃を受け三度目に被雷を被るというトラック諸島への出征は、多くの犠牲者をいたずらにだすのみであった。同じ船団でトラック諸島へ渡った松本連隊は将兵八三〇名が戦死しているが、その大半の六八九名は輸送途中で戦死していると云う。

富山の六十九連隊は総員二七一一名中に戦病死者は一八六名であったと云う。

戦

争終結後にも多くの戦死者を出した従軍歴を持つのが現在立野原に在住の山本忠一である。

昭和十九年十一月二十日現役兵として、富山歩兵三十五連隊に十月に亡くなった母の四十九日を待たずに入隊するのであった。ろくな訓練もせずその月二十五日に富山を出発し釜山に上陸している。その装備たるや哀れなもので、竹籠の飯ごう・竹筒の水筒・五人に一人のまともな銃であったにも関わらず、員数合わせはそんなものでも無くしたら大目玉であったと云う。

現地教育といって二ヶ月の訓練を一ヶ月で期間で終了するのだから、覚える暇もなくむちゃくちゃに詰め込むので中途半端な兵隊になり、返って戦闘では犠牲者を出すことになった。訓練が詰め込みのため、習得できないと言つて教官からのビンタ教育が凄まじかった。「こんなひどい仕打ちをするのは、必ずしも古参兵全員でなく、どの内務班にも幾人かのならず者の古参兵がいて、これが残酷性を発揮しては、野蛮極まる責め折檻をしては、不必要に初年兵を苦しめて見当違いの上官意識に自己満足をしている」ようだった。理性的な人間感情が麻痺していくものが

軍隊にあった。軍隊は三ヶ月でも先に入隊した者は偉く、どんなに階級や年齢や学歴が上でも先輩兵には頭が上がらないものらしく、万年以上兵といつて三年もすれば上等兵になるのに、それ以上の階級に上がれない者が一番に厄介であった。

山 本氏は虎の子分隊としての教育を受けて後送電線の警備やトーチカ勤務を終え、兵卒の兵長から下士官に上がる候補として大隊本部にて教育中に終戦となった。

中国は関東軍（日本軍）と国民党軍（蒋介石軍）と八路軍（共産軍）の三つどもえの戦争であり、日本軍は広い中国で点と線を確保しているだけであつた。日本は国民党軍に対して武装解除することになるのだが、一方の共産軍は敗戦と知るとにわかには日本軍武器を取るために攻勢となり、防衛一方の日本軍は多大の犠牲者を終戦後にも出すのであつた。

武装解除後は在留邦人の引き上げ援護を昭和二十一年五月まで続け、ようやくに帰国の途に就いた。

盛田正一

昭和十三年一月現役兵として富山第三十五連隊に入隊し、三ヶ月後中支派

遣となり、中国大陸を転戦し岳州を最後に昭和十四年八月除隊するが、その間に『城端時報』を読み、購読したお礼の葉書を出したのである。

昭和十九年一月に赤紙にて召集され、金沢第九連隊騎兵隊に入隊する。二ヶ月後パラオ島へ派遣となるが、制海権を失っていたので、敵潜・敵機のみを盗んでの航海であり四十数日かかってようやくパラオに上陸した。食糧・弾薬の補給もない自給自足の生活のなか終戦を現地を迎え、十二月に浦賀に上陸し復員する。

朝日八左衛門

昭和十年徴兵検査を受けるが、補充兵に編入されて兵役には就いていない。だが昭和十二年八月に充員招集（赤紙）により歩兵第九師団第七陸上輸卒隊に編入され大阪港から豊台に到着し、石家荘濫陽河会戦に参加、徐州作戦に出撃し攻防戦の結果占領する。のちに勲八等白色桐葉章支那事変従軍記章を受賞する。太平洋戦争直前の昭和十六年七月に二度目の臨時招集を受けて、東部第四九部隊に入隊し牡丹江省掖河にて国土防衛の任に挺身した。昭和十七年一二月に帰還招集解除となる。